上佐鳥中原前Ⅲ遺跡

特別養護老人ホーム増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013.5

前橋市教育委員会
社会福祉法人上川会
山下工業株式会社

上佐鳥中原前Ⅲ遺跡

特別養護老人ホーム増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１３．５
前 橋 市 教 育 委 員 会
社 会 福 祉 法 人 上 川 会
山 下 工 業 株 式 会 社

例　　言

1．本書は、特別養護老人ホーム増築工事に伴う上佐鳥中原前Ⅲ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は、社会福祉法人上川会の委託を受け、前橋市教育委員会文化財保護課（福田貫之）の指導のもと山下工業（代表取締役　山下　尚）が実施した。

3．発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、社会福祉法人上川会の費用負担によって行われた。

4．発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地　群馬県前橋市上佐鳥町 771－2、772

遺跡コード　24G17

調査面積　302.1㎡

調査期間　平成 25 年 3 月 4 日～平成 25 年 3 月 25 日

整理期間　平成 25 年 3 月 26 日～平成 25 年 5 月 15 日

調査担当者　櫻井和哉（山下工業株式会社）

5．発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会に保管してある。

6．本書の編集執筆はⅠを福田貫之（前橋市教育委員会）が行い、その他を櫻井和哉が担当した。

7．発掘作業に関わった方々は以下のとおりである。（五十音順・敬称略）

【発掘作業】　稲田康夫　岩渕立弥　内田晴男　岡田和夫　神山正男　小和瀬深夏　関口弘子　田村美知子　曲澤年雄　森田恵子

【整理作業】　永島香織　堀地文子

8．発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々からのご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）

青木利文　鈴木徳雄　田中隆明　永井智教　日沖剛史　山際哲章

凡　　例

1．表紙に 2006 年国土地理院撮影の航空写真を編集・加工し使用した。

2．挿図に建設省国土地理院発行の 1：25,000 地形図、昭和 43 年前橋市都市計画図、平成 21 年前橋市都市計画図を編集・加工し使用した。

3．遺跡、全体図におけるＸ・Ｙ値は、平面直角座標Ⅸ系（日本測地系）に基づく座標値である。

4．挿図中に使用した北は座標北である。

5．遺構名称は先行して調査された上佐鳥中原前Ⅱ遺跡のものに準ずる。なお遺構略称は以下のとおりである。

【溝跡】・・W　【ピット】・・P

6．遺構図・遺物図の縮尺は原則として以下の通りである。

【遺構平面図】1：120　【土層断面図】1：60　【遺物図】1：3

7．遺構・遺物の計測値は、（　）は推定値、[　] 残存値で示す。

8．土層及び遺物の色調の表記は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）に基づく。

9．本書で用いる示標テフラの略称と年代は以下のとおりである

【浅間Ａ軽石】	As－A	天明３年（1783）
【浅間Ｂテフラ】	As－B	天仁元年（1108）
【榛名二ツ岳－渋川テフラ】	Hr－FA	6 世紀初頭
【浅間Ｃ軽石】	As－C	3 世紀末～ 4 世紀初頭

目　　次

例言・凡例
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境……1
Ⅲ　調査の方法と経過……6
Ⅳ　基本層序……7
Ⅴ　遺跡の概要……8
Ⅵ　調査の成果と課題……9
引用・参考文献
写真図版
報告書抄録・奥付

挿図目次

Fig.1　遺跡周辺の条里と用水系統 …… 2
Fig.2　前橋市周辺の地形 …… 2
Fig.3　周辺の遺跡 …… 4
Fig.4　調査区位置図（1）…… 6
Fig.5　調査区位置図（2）…… 7
Fig.6　上佐鳥中原前Ⅲ遺跡基本層序 …… 8
Fig.7　上佐鳥中原前Ⅲ遺跡全体図 …… 11
Fig.8　1号畦畔・W－1～2 …… 12
Fig.9　2号畦畔・W－1 …… 13
Fig.10　4号畦畔・P－1～6・出土遺物…… 14

表目次

Tab.1　周辺の遺跡 …… 5
Tab.2　遺構計測表 …… 9
Tab.3　水田面標高値計測表 …… 10
Tab.4　遺物観察表 …… 10

図版目次

PL.1　調査区全景（北東から）
　　調査区全景（北西から）
PL.2　基本層序B
　　基本層序D
　　1号畦畔全景（北から）
　　1号畦畔セクションAA’（南から）
　　2号畦畔全景（北から）
　　2号畦畔水口状遺構（東から）
　　2号畦畔置石検出状態（東から）
PL.3　2号畦畔（東側へ分岐）
　　2号畦畔セクションAA’（南から）
　　2号畦畔セクションBB’（南から）
　　4号畦畔検出状態（南東から）
　　4号畦畔セクションAA’（西から）
　　W－1号溝セクション（西から）
　　作業風景（南東から）
　　出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

平成 24 年 11 月 8 日付けで社会福祉法人上川会より特別養護老人ホーム増築工事に伴う試掘調査依頼書が前橋市教育委員会に提出され、同年 11 月 29 日に試掘調査を実施し、浅間Ｂ軽石で覆われた水田跡を確認した。試掘調査の結果を受け、埋蔵文化財の保護について協議を重ねたが、設計変更は不可能であるため発掘調査を実施し記録保存の措置を執ることで合意を得た。前橋市教育委員会では既に直営による発掘調査を実施しており、直営による調査の実施が困難であるため、「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に則り、前橋市教育委員会の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、発掘調査を実施することになり、平成 25 年 2 月 22 日付けで社会福祉法人上川会、民間調査組織である山下工業株式会社で、前橋市教育委員会との間で発掘調査実施に関する協定書が締結され、同年 3 月 4 日から現地調査が開始された。

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境

1　地理的環境

上佐鳥中原前Ⅲ遺跡は、標高約 89m、ＪＲ前橋駅から南南東に約 3㎞の地点に位置し、地形的には利根川左岸の前橋台地上に立地している。この前橋台地は、約二万年前に遡る浅間山起源の岩屑なだれ堆積物である前橋泥流を基盤に形成されている。この前橋泥流は利根川によって形成された前橋砂礫層を覆い尽くし、一帯に広大な扇状地状の平坦地を形成したと考えられる。その後、前橋台地面は中小河川による浸食と堆積が始まり、自然堤防や後背湿地が発達したようである。航空写真や地形図からは、前橋台地上に広がる水田地帯中の微高地上に集落が島状に点在する様子が見て取れ、周辺地形の形成過程が想起される。また、前橋台地の北側、赤城山麓との間には北西から南東方向の細長い低地帯が広がっており、これを広瀬川低地帯と呼ぶ。現在利根川は前橋台地上を貫流しているが、これは 15 ～ 16 世紀頃の変流によるものとされている。本来利根川はこの広瀬川低地帯に流路をとっていたとされ、そもそもこの低地帯も前橋泥流堆積後の台地面を利根川が浸食することで形成されたものである。

上佐鳥中原前Ⅲ遺跡の近隣は現在も田園風景が広がる景観を呈している。もともと付近一帯が伝統的に水田稲作を主要な生産基盤として発展してきたことは想像に難くない。陸軍迅速図や戦後の米軍撮影空中写真においても上佐鳥町周辺の前橋台地はほとんど水田化されている状況が窺える。つまり、前橋泥流の発生に始まる前橋台地の形成は、結果として周辺の地形を平坦化し（註 1）、広大な水田可耕地をもたらしたと捉えることができるのであり、本遺跡周辺地域が県下有数の穀倉地帯として成立する前提の一つとなったと考えられるのである。また、広瀬川低地帯に流れる、現在は広瀬川と桃ノ木川であるが、旧利根川水系の水を、台地と低地の比高差という地形的な制約を克服し灌漑用水として前橋台地面への引水を達成させたことが、その後に始まる台地上における大規模な水田開発を支えるもう一つの前提となったと考えられるのである。

2　歴史的環境

古墳時代　前橋台地面での水田開発は古墳時代に至って本格的に開始されるのであろう。近年の発掘調査に伴って増加した As－C・Hr－FA・Hr－FP といったテフラやこれに伴う泥流堆積物などを鍵層として検出される水田遺構の事例は、本遺跡周辺地域の前橋台地上において古墳時代を通じて連綿と水田耕作が営まれたことを示すものである。また、この時期は概して自然地形に柔軟に適応させる形で施工された小区画水田が営まれており、開発の当初は前橋台地の表層を流れる風呂川・端気川・藤川のような自然河川を灌漑に用いることから始まったと思われる（註 2）。それに加えて低地帯の開発にあたっては人工的に用排水路の整備も成されたと思われるが、前期で既にそれが大規模に行われていた形跡もある。例えば徳丸仲田遺跡Ｇ区 6 号溝やその南東に所在する玉村町砂町遺跡 7 号溝は開鑿の年代が古墳時代前期に遡る大溝で、両者は同一のものである可能性が指摘されてい

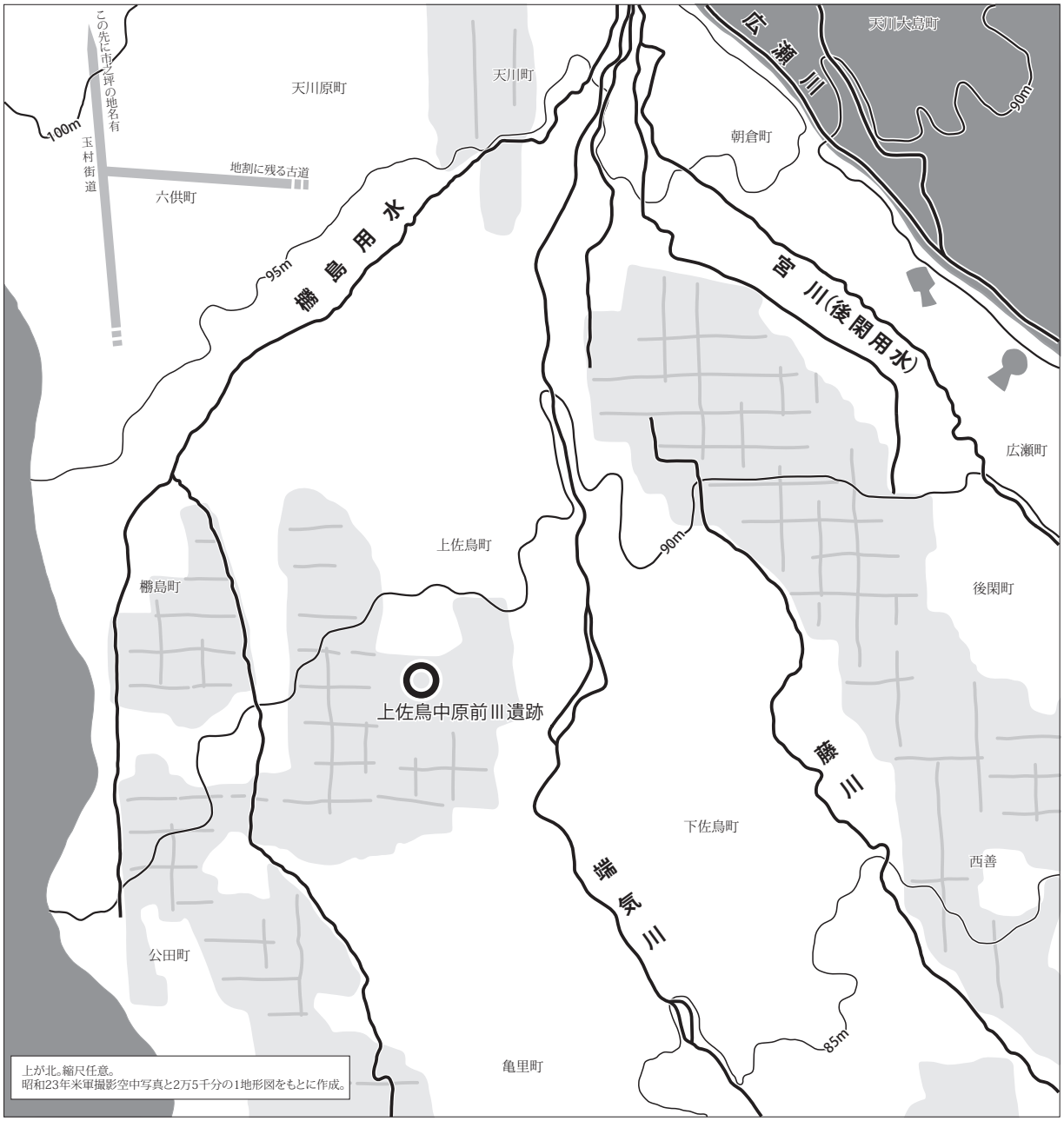


Fig.1　遺跡周辺の条里と用水系統

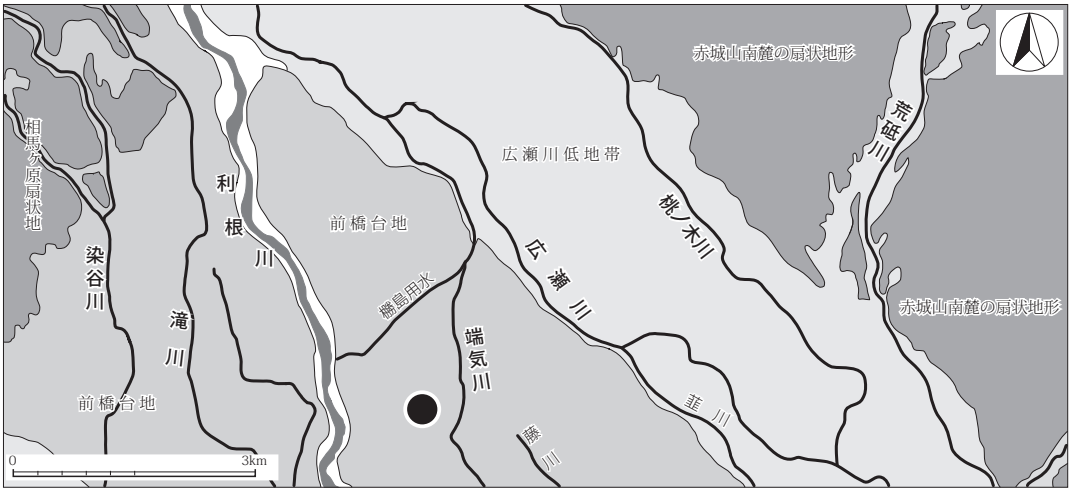


Fig.2　前橋市周辺の地形

る（中里　2007）。この見解に依拠するならば、この大溝は両遺跡間の距離約 2㎞を超える長大な構造物として見なすことができ、その開発の規模や性格を推し量ることができる。また、前橋市本町 3 丁目から文京町・天川町にかけて存在する女溝は、並走する 2 条の大溝が最近まで地割として残ったもので、その内の一つである 1 号女溝の開鑿年代が古墳時代後期に遡る可能性が指摘されている（前原ほか　2001）。とするのであれば、古墳時代後期の段階で既に低地帯を流れる旧利根川水系の水を台地上に揚水し、灌漑用水として使用していたことを示唆するものである。ともあれ、こうした大溝状遺構は、古墳時代において台地面を流れる自然河川の灌漑面積の拡大や用水量を補完するものとして存在し、該期の前橋台地上の水田開発を漸進させる性格があったと思われる。

古墳時代における前橋台地上の水田開発が広域に着手されたことは集落遺跡の分布からも裏付けられるであろう。市域内利根川左岸の前橋台地上を中心に古墳時代前期に限って概観しても、横手早稲田遺跡・徳丸仲田遺跡・房丸桜町遺跡・山王若宮遺跡・公田池尻遺跡・公田東遺跡・櫛島川端遺跡・後閑団地遺跡・六供東京安寺遺跡・六供中京安寺遺跡・六供遺跡群№.5・南町市之坪遺跡・石倉下宅地遺跡などで竪穴住居跡が確認され、広範囲に多数分布する様子が窺える。また、そのほとんどは前橋台地上の低地帯の開発を前提として設営されたものと見なして差し支えないであろう。弥生時代後期のものは櫛島川端遺跡や徳丸仲田遺跡などで竪穴住居跡や遺物が少数確認される程度であるのに対し、古墳時代前期に至って急激な遺跡の増加を見ることは少々異質な現象であり、地域における開発史・景観史上の画期と見なすことができると思われる。古墳時代中期（註 3）・後期では、徳丸仲田遺跡・川曲遺跡・下佐鳥遺跡・公田池尻遺跡・公田東遺跡・櫛島川端遺跡・櫛島川端Ⅱ遺跡・朝倉工業団地遺跡群・六供遺跡群・六供遺跡群№.5 ～ 7・生川遺跡・南町市之坪遺跡などが挙げられ、依然として多くの集落遺跡を確認することができる。また、前期の遺跡と近い場所に分布するものも多く、概ね集落占地の傾向を大きく変えることなく推移するように見受けられる（註 4）。

古代以降　遺跡の所在する上佐鳥町は、律令期に元総社地区では国府や国分寺が造営されたが、この古代上野国の政治的中心に近い。また、和名類聚抄にみる群馬郡駅家郷は厩橋城の名に名残を見せ、那波郡朝倉郷は端気川左岸、現在の朝倉町付近に推定されることから、群馬郡と那波郡の境界に近い区域であったと思われる。律令期は、広く平坦な地形が広がる前橋台地上の水田地帯で、条里制の施行が開始された時期でもある。前橋長瀞線改築工事、北関東自動車道建設、南部拠点地区土地区画整理事業等に伴う発掘調査では、As－B 直下の条里水田の検出事例が豊富であり、文京町№.1 遺跡では、As－B 下に条里坪線に沿う可能性のある畦畔（前田　2006）が検出されている（註 5）。この事から 12 世紀初頭の前橋台地上では、現利根川以北、端気川水系に限ってみても、水源から流末に及ぶ範囲に条里形地割の広がる景観が形成されていたことが推察される。群馬県内における条里施工の開始年代については把握していない。しかし、広瀬川低地帯桃ノ木川左岸の中原遺跡群では、弘仁九年（818）の地震に伴う洪水層の下から条里水田が検出され、その下層から 8 世紀末から 9 世紀初頭に帰属する住居跡の存在が確認されている。また、西田遺跡では As－B 下の水田が 9 世紀後半の住居跡を削平して造成される事例が報告されている。この様な事例から前橋台地上においても条里の施工年代は 8 世紀代に遡るのであろうし、政治的・歴史的な要因に左右されながらも条里形地割が一定の時間差を持って台地面に拡充されていった過程が想起される。なお、条里施工にかかる開発では、先の西田遺跡の事例のように微高地を削平して水田化するなど自然地形を大きく改変して耕地を造成することもしばしばあったようである（註 6）。また、一面にわたって人工的な方格区画を連鎖させる耕地の存在形態は、従来の灌漑体系の更新を迫るものであり、自然河川の流路変更（註 7）や新たな溝渠の開鑿を伴って体系的に用排水系統の整備も行われたと考えられる。こうした耕地形態と灌漑体系の変更は一定の計画性に基づく大規模な土木事業によって達成されたとみるべきであり、ここに律令期における開発の特徴を看取することができる。

該期の集落の動向であるが、7 世紀後半から 8 世紀にかけての集落遺跡の事例が少ない点が指摘される。現状

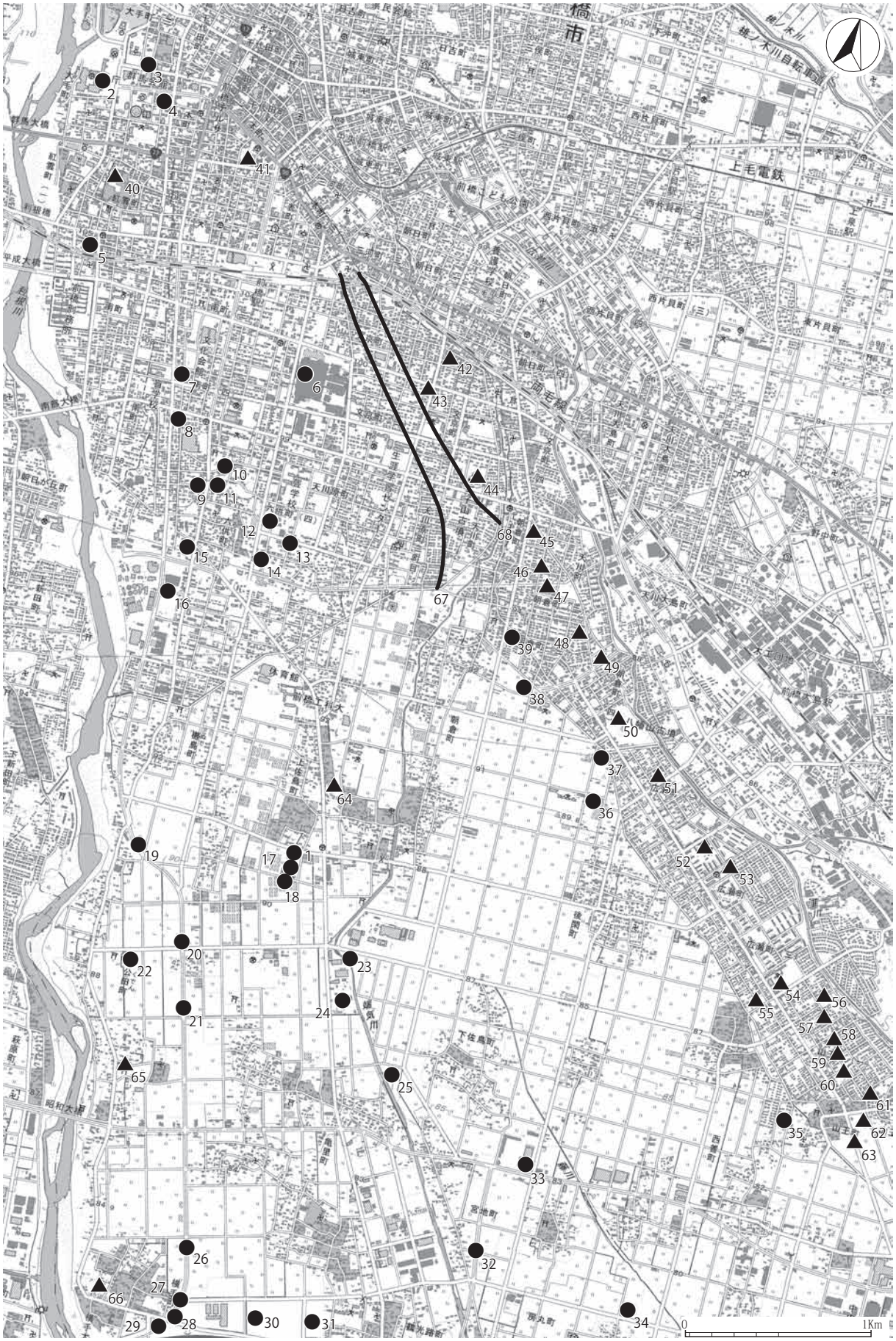


Fig.3　周辺の遺跡

では、公田東遺跡・公田池尻遺跡・朝倉工業団地遺跡群・朝倉伊勢西№２遺跡などに集落の広がりを認めることができる。しかし、管見に触れる限りではこの時期の竪穴住居跡の検出事例をあまり多くは確認できず、明瞭に集落の動態を捉えることは難しい。一方で９世紀以降、とりわけて９世紀後半からは、台地面の微高地上に多数の集落の分布が認められ、徳丸仲田遺跡・鶴光路榎橋Ⅱ遺跡・前田遺跡・前田Ⅴ遺跡・房丸桜町遺跡・西善鍛冶屋遺跡・後閑Ⅱ遺跡・後閑団地遺跡・朝倉伊勢西№２遺跡・六供東京安寺遺跡・六供中京安寺・六供下堂木Ⅲ遺跡・石倉下宅地遺跡・紅雲町村東遺跡・前橋城などがその事例として挙げられる。この事は先に触れた７世紀から８世紀にかけての集落の調査事例が少ない状況と比べると対照的である。律令期における前橋台地上端気川水系での集落変遷は、何かしらの政治的・歴史的背景に起因するのかもしれないが、それが調査地点の偏りや調査面積の広狭による場合も想定されるところであり、今後の検討の余地を残すものであると思われる。

ともあれ、古代において前橋台地上に形成された条里形地割は、例えばその後の浅間山の爆裂や利根川の氾濫にみる自然災害、または人間活動そのものの営為によってそこかしこに変化を刻まれてきた。一方で遺跡周辺の区域では昭和の時代に至るまで広く条里形地割が残存し、歴史的景観の一部を構成してきたことは、地域史の中で意義あるものと思われる。また、その成立が古代に遡りうることが指摘される端気川や宮川（後閑用水）の様な用排水系統が大枠のところで踏襲されてきたであろうことの意味も大きいであろう（註８）。

今回報告に及ぶ上佐鳥中原前Ⅲ遺跡において検出された水田跡は、As－Bの降下を契機に地中に埋没した条里遺構の一端を成す可能性があり、水田稲作を基盤として発展してきた地域社会の歴史的過程の一端を伝えるものとして位置づけることができる。

（註１）　前橋台地形成層が泥質で緻密である点にも注意したい（峰岸・能登　1981）。

（註２）　公田東遺跡のⅡ区１号河道には堰状の構築物の痕跡が検出され、徳丸仲田遺跡Ｊ区の藤川旧流路には水辺祭祀が想定される遺物の出土をみることから、当時の人間活動と自然河川の関わりを窺い知ることができる。

（註３）　和泉式期に比定されるものが少なく明確に識別できていない。中期と捉えたもののほとんどは鬼高式の初現的な様相を呈するものである。

（註４）　一方で横手早稲田遺跡の様に後期には集落域が水田化し、山王若宮遺跡のように前期の集落が後期には墓域に転換するなど、明らかに土地の利用形態を変える場合もある。こうした集落移動の契機や要因を探っていく必要もあると思われる。

（註５）　端気川左岸六供町以北には条里形地割の残存を認めがたい。しかし、二子山古墳の南を東西に通過する道路や、六供八幡神社西脇を南北に走る市道（玉村街道）は条里形地割の痕跡と見なすことができる。また、南町には市之坪の地名もあることから、周辺の低地帯における埋没条里遺構の存在が示唆される。ちなみに古代におけるこの区域の給水は風呂川水系はもとより、女溝のような人為的な幹線用水路の存在も想定すべきであろう。

（註６）　公田東遺跡の事例にみるように古墳時代の集落域が、律令期の開発で水田化される事例も散見されるところである。

（註７）　例えば端気川の河川改修などが律令期に遡る可能性は梅沢重昭氏によって指摘されている（梅沢　1987）。

（註８）　宮川が比較的良好に条里形地割を残す朝倉町・後閑町・西善町周辺に広い灌漑面積をもつことも示唆的である。櫛島用水も端気川右岸で条里形地割を残す上佐鳥町・櫛島町・公田町を広く灌漑するものだが、分水点の位置や走向等を踏まえると開鑿の年代は下るかもしれない。

Tab.1　周辺の遺跡

№.	遺跡名	備考	№.	遺跡名	備考	№.	遺跡名	№.	遺跡名
1	上佐鳥中原前Ⅲ遺跡	古代：水田	21	公田池尻遺跡	古墳：集落・水田　古代：水田	41	前橋９号墳	61	上陽 16 号墳
2	前橋城Ⅱ	古代：集落	22	公田東遺跡（調査会）	古代：水田	42	不二山古墳	62	文殊山古墳
3	前橋城（三の丸東地点）	古代：集落	23	下佐鳥遺跡	古墳：集落	43	カロウト山古墳	63	阿弥陀山古墳
4	前橋城（車橋門丸馬出）	古代：集落	24	朝倉工業団地遺跡群	古墳：集落・水田　古代：集落・水田	44	前橋二子山古墳	64	上川淵 97 号墳
5	紅雲町村東遺跡	古代：集落・水田	25	川曲遺跡	古墳：集落	45	小旦那古墳	65	下川淵３号墳
6	文京町№１遺跡	古代：水田	26	亀里平塚遺跡	古墳：水田　古代：水田	46	長山古墳	66	浅間神社古墳
7	南町市之坪遺跡	古墳：集落	27	横手宮田遺跡	古墳：水田　古代：水田	47	朝倉Ⅱ号墳	67	１号女溝
8	生川遺跡	古墳：集落	28	横手宮田Ⅱ遺跡	古代：水田	48	朝倉Ⅰ号墳	68	２号女溝
9	六供遺跡群№５	古墳：集落	29	横手早稲田遺跡	古墳：集落・水田　古代：水田	49	朝倉Ⅲ号墳		
10	六供遺跡群№６	古墳：集落・周溝墓	30	亀里油面Ⅱ遺跡	古代：水田	50	前橋八幡山古墳		
11	六供遺跡群№７	古墳：集落	31	鶴光路練引Ⅱ遺跡	古代：水田	51	前橋天神山古墳		
12	六供下堂木Ⅴ遺跡	古代：集落・水田	32	東田遺跡	古墳：遺物	52	上川淵 97 号墳		
13	六供下堂木Ⅱ遺跡	古墳：集落・水田　古代：集落	33	宮地中田遺跡	古代：水田	53	大屋敷古墳		
14	六供東京安寺遺跡	古墳：集落　古代：集落	34	房丸桜町遺跡	古墳：集落　古代：集落	54	オトウカ塚古墳		
15	六供中京安寺遺跡	古墳：周溝墓・古墳　古代：集落	35	西善鍛冶屋遺跡	古代：集落	55	ボンゼン塚古墳		
16	中大門遺跡	古代：水田	36	後閑Ⅱ遺跡	古代：集落	56	丸塚山古墳		
17	上佐鳥中原前Ⅱ遺跡	古代：水田	37	後閑団地遺跡	古墳：集落　古代：集落	57	上陽 24 号墳		
18	上佐鳥中原前遺跡	古代：水田	38	朝倉伊勢西№２遺跡	古代：集落	58	大塚北古墳		
19	櫛島川端遺跡	古墳：集落・水田　古代：水田	39	鎮守廻り遺跡	中世：大溝	59	山王大塚古墳		
20	公田東遺跡（事業団）	古墳：集落・周溝墓・水田	40	龍海院裏古墳		60	山王金冠塚古墳		

Ⅲ　調査の方法と経過

委託調査個所は特別養護老人ホーム増築工事に伴う建物建築予定地であり、調査面積は 302.1㎡である。調査区のグリッドは日本測地系に基づく上佐鳥中原前遺跡従来の 4m グリッドに準拠して設定した。グリッド基点（X0・Y0）における日本測地系と世界測地系それぞれの座標値を以下に示しておく。

日本測地系　X＝39400.000　Y＝－67000.000　世界測地系　X＝39754.904　Y＝－67291.379

表土除去には 0.25 バックホーを使用した。遺構測量はトータルステーションを用いて行い、土層断面図等は適宜実測により補った。写真撮影はアナログカメラ（35㎜モノクロネガ・カラーポジ）とデジタルカメラを併用し、調査区の全景撮影には高所作業車を使用した。今回の調査目的は As－B 直下の水田遺構の検出であるため、重機でⅣ層まで掘削したのち、人力作業に切り替えた。As－B 除去作業では、軽石をジョレンで水平に削ぐようにし、畦畔の頂部を抑えるように心掛け、その有無を確認したのちにジョレン・移植ゴテを併用し水田面の検出に努めた。なお、調査の経過は以下のとおりである。平成 25 年 3 月 4 日から調査開始、3 月 6 日～ 7 日の間に表土掘削を行い、これに合わせて人力による As－B 除去作業も開始し、3 月 12 日に終了する。3 月 13 日に調査区全景写真の撮影を行う。その後、基本層序の確認のためのトレンチ掘削、畦畔の断割りを行い 3 月 15 日までに終了した。遺構測量及び調査区埋め戻しを 3 月 25 日までに行い調査が完了した。

Fig.4　調査区位置図（1）（昭和 43 年前橋市都市計画図を編集加工）

Ⅳ　基本層序

本遺跡では 4 ヶ所での基本層序の観察を基に柱状図を作成した（Fig.6）。Ⅱ層から上層は As－A の混入が認められる近世～現代の耕作土 (註 1)、Ⅲ層は As－A を含まず、As－B が緊密に混じる砂質土である。やや泥っぽくよく攪拌された印象も受け、As－B 降灰以降の耕作土である可能性が指摘される。Ⅳ層は As－B 一次堆積層として認識され、調査区内では概ね 5㎝～ 10㎝の厚さで確認されたが、3 トレンチより西、7 トレンチより南では、耕地整理に伴う掘削が深くに及び堆積が薄く、場所によっては削平や撹拌を受けていた。堆積の厚い東側では場所によって上層に灰赤色の火山灰ブロックが僅かに散布する状況も見受けられる。Ⅴ層からⅦ層までが As－B 下の水田耕作に関係した土層と捉えることができる。Ⅶ層は斑鉄の発達、マンガン粒の凝集がやや目立つことから水田の基盤層、その上層のⅥ層を耕作土として把握できると思われる。なお、Ⅴ層はⅥ層の上層に腐植が発達したものであり、またⅤ層とⅥ層の推移は漸移的である。Ⅷ層から下層、XXI 層 (註 2) より上層の土層の形成はその多くが砂層や細砂含む粘質土層などで構成されるため、概ね水成堆積に起因すると考えられる。一方でⅨ層、XI 層や XIV 層の様に有機質土壌が複数枚観察される事から、若干の水流の間断を挟みつつ土層が形成されていった様子も窺われる。土層の形成年代を示すものとして、Ⅶ層・Ⅷ・Ⅹ層が挙げられる。Ⅶ層は 7 世紀前半の土師器坏小破片が出土することからその上限が示唆される。Ⅷ層はブロック状でⅦ層下に疎らに分布するテフラ

Fig.5　調査区位置図（2）（平成 21 年前橋市都市計画図を編集加工）

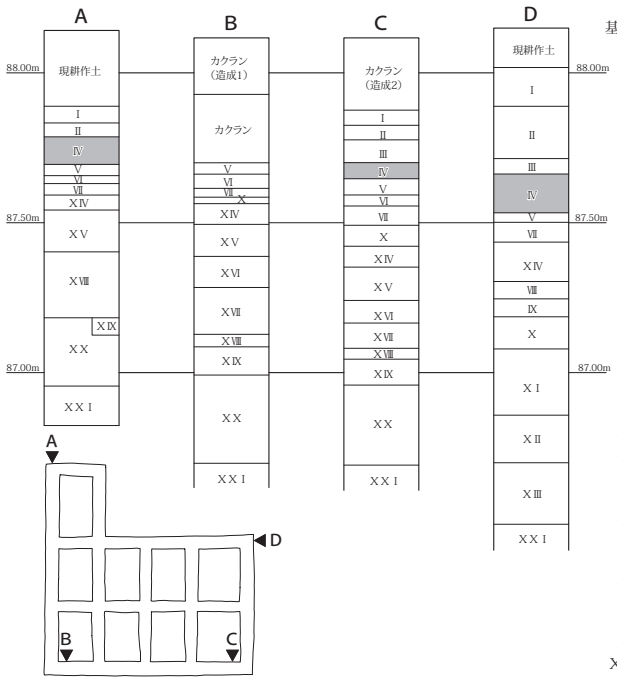


Fig.6　上佐鳥中原前Ⅲ遺跡基本層序

で、層序やシルト質で黄褐色を呈する特徴から Hr－FA であると想定される。しかし、現地での観察から一次堆積によるものか、泥流起源のものかの識別まではできない。Ⅹ層は粒度が粗く粘性の強い土層で白色軽石を多量に含む土層である。この白色軽石は層序から As－C と推定され、上佐鳥中原前遺跡Ⅷ層に対比されると思われる。

（註 1）　Ⅰ層は W-1 の新旧がはっきり分からない為、耕地整理の影響を受けている可能性もある。

（註 2）　この層は灰白色でシルト質の土層であり、一部に拳大の角礫が認められる部分もある。上佐鳥中原前遺跡Ⅻ層に対比できると思われる。

Ⅴ　遺跡の概要

上佐鳥中原前Ⅲ遺跡の南側に隣接する区域では平成 9 年度に上佐鳥中原前遺跡、平成 15 年度に上佐鳥中原前Ⅱ遺跡と調査されており、As－B 直下の水田跡が検出されている。また遺跡が立地する周辺地域、上佐鳥町・櫛島町・公田町一帯は、耕地整理以前には比較的良好な条里形地割を残している区域が認められ、今回の調査地点も条里形地割としての区画性はやや不鮮明ながらその一端を構成している。それゆえ、今回の発掘調査では過年度調査の成果の追認、つまり水田遺構の広がりと水田区画の連続性を確認すること、および As－B 直下における条里関連遺構の有無の確認が課題とされた。

水田跡　As－B 一次堆積層直下に 3 条の畦畔を伴って検出された。水田面は全体的には北西から南東へ向かって緩やかに傾斜する傾向を示すが、調査区北東隅付近は部分的にやや窪地を形成している。水田面の状況は浅い凹凸や起伏がやや認められるものの、歩行痕や耕作痕などは検出されなかった。**1 号畦畔**（Fig.8）　調査区西側 X16・Y －（マイナス）15 グリッドから X15・Y －（マイナス）8 グリッドにかけて検出された。概ね南北軸だが、座標北に対し約 7°東偏する走向をとり、標高 87.75m の等高線にほぼ並走する。北半分では田面との比高差 2 ㎝程度で畦畔の隆起を認識しうるが、南半分は耕地整理による削平の影響を受け、その走向を確認しがたい。**2 号畦畔**（Fig.9）　調査区東側 X19・Y －（マイナス）13 グリッドから X19・Y －（マイナス）8 グリッドにかけて検出された。概ね南北軸だが、座標北に対し約 2°東偏する走向をとり、等高線とほぼ並走する。北半分では田面との比高差 4㎝程度で畦畔の隆起も明瞭だが、南側に行くにつれ田面との比高差浅く捉え辛い。また中

央部Y－（マイナス）10グリッド付近から東側へ分岐する。この東西軸の畦畔は田面との比高差がほとんどなく、捉え辛いものであった。同様に西側にも分岐するようであるが、こちらは調査区壁がせまっており、田面との比高差も僅かなため、明らかに出来なかった。なお南北軸畦畔の北側に水口状に途切れる個所が認められ、また、置石も1点確認された。**4号畦畔**（Fig.10）　調査区東側X18・Y10グリッド付近にかけて検出された。概ね南東－北西軸で座標北に対し約55°西偏し、等高線に対し斜行する走向をとる。北西端で西方向と北西方向の2方向に分岐すると思われるが、畦畔の隆起が不明瞭で捉え辛い。その走向から元来は2号畦畔から派生したことが想定される。

その他の遺構　溝跡（Fig.8～10）　2条検出した。ガラス片やレンガを伴う近・現代のものである。W－1・2ともに一連のものである。W－1は等高線に対し概ね直交し、W－2は概ね平行する走向をとる。W－1の底面は西から東に傾斜し、W－2は北から南に緩やかに傾斜している。W－1･2ともにセクション上で掘り直しを伴っている様子が確認される。**ピット**（Fig.10）　6基確認されている。人為的なものであるかどうかは不明だが、全てⅢ層土によって埋没している。

Ⅵ　調査の成果と課題

今回の調査では、As－B直下から3条の畦畔が検出され、本遺跡が平安時代末期の水田跡であることが判明した。これは1・2次調査の成果を追認するものである。今回を含め3回に及ぶ調査の成果では、坪境を示す畦畔や水路といった直接的に条里の施工を裏付ける遺構の検出はなかった。しかし、畦畔の走向が東西・南北軸を指向する傾向は、条里形地割との一定の関連を想起させるものがある。また、上佐鳥町・欅島町・公田町付近は、端気川右岸でも耕地整理以前は比較的良好に条里形地割の残存が認められた区域であり、本遺跡もこの区域の縁辺部に所在している。昭和43年時点の前橋市都市計画図においても、遺跡周辺ではやや地割に乱れが認められるものの、一町方格の区画を復元することが概ね可能であり、条里形地割が相対的に近い形で踏襲されてきた様子が窺われる(註1)この点も考慮すれば、断定はできないものの本遺跡検出の水田跡は、埋没条里遺構の一端を形成していたと捉えても差し支えないであろう。また、As－Bの降灰は一定期間の耕作放棄を余儀なくされたとも思われるが、この断絶を挟んでも大きく形を変えることなく地割を復旧し再開痕されていったであろうことは地域の景観史のなかでも意味あることであると思われる。

なお、今回の調査の中で、検出した水田跡がAs－B降下時に耕作がなされていない、つまり休耕田または耕作放棄地であった可能性を感じる側面もあった(註2)。しかし、その根拠については、感覚的な部分もあり、現状では妥当性をもって説明できないため、今回は触れないでおく。今後の課題としたい。

（註1）本遺跡西方、上佐鳥町字西原東辺を南北に通る道路と本遺跡北側に東西方向に通る道路は条里の坪線に沿ったものと考えられる。遺跡の西方約400ｍの地点で交差するが、この交差点から東に約4町分戻ったところが中沢環濠屋敷の南東角にほぼ対応している。これを目安にすれば、遺跡周辺の現況の地割の中に比較的一町方格の区画を見て取ることが容易である。

（註2）全体的に区画性に乏しく一枚の水田が広い点や、同一区画内での田面の比高差がやや著しい点、また、畦畔の残存状況が悪く隆起が不明瞭な点からおぼえた印象である。

Tab.2　遺構計測表

遺構名	グリッド	方位	長さ（m）	幅（cm）	高さ（cm）	備考
1号畦畔	X16・Y－15～X－15・Y－8	N－7°－E	28.25	84～102	0～2	
2号畦畔（南北）	X19・Y－13～X19・Y－8	N－2°－E	18.55	66～88	1～5	水口・置石。
2号畦畔（東西）	X19・Y－10～X21・Y－10	N－87°－W	8.4	52～72	0～1	
3号畦畔	－	－	－	－	－	欠番。
4号畦畔	X18・Y－10	N－55°－W	[2]	44～66	0～3	2号畦畔から分岐か。
遺構名	グリッド	方位	長軸	短軸	深さ	備考
P－1	X－15・Y－14	－	26	20	18	覆土Ⅲ層。
P－2	X－14・Y－14	－	[30]	28	19	覆土Ⅲ層。
P－3	X－14・Y－13	－	36	24	16	覆土Ⅲ層。
P－4	X－17・Y－10	N－80°－E	60	50	14	覆土Ⅲ層。
P－5	X－17・Y－10	－	38	30	14	覆土Ⅲ層。
P－6	X－19・Y－8	－	32	24	16	覆土Ⅲ層。

Tab.3　水田面標高値計測表

水田区画	田面標高値（m）				田面平均標高値（m）	田面最大標高値（m）	田面最小標高値（m）	比高差（㎝）	備考
	北西隅	北東隅	南西隅	南東隅					
1 号畦畔西	87.77	87.73	87.75	87.75	87.77	87.80	87.72	8	
1・2 号畦畔間	87.75	87.60	87.75	87.68	87.71	87.80	87.62	8	
2 号畦畔東（北）	87.59	87.52	87.70	87.64	87.61	87.70	87.50	20	北東へやや傾斜。
2 号畦畔東（南）	87.69	87.64	87.67	87.64	87.66	87.69	87.63	6	比較的平坦。

Tab.4　遺物観察表

出土遺構	遺物番号	種別	器種	口径	底径	高さ（㎝）	胎土	色調	形態・技法上の特徴	残存率	備考
As－B 下水田跡	1	土師器	台付甕	－	－	[3.1]	鉄粒・白粒・砂粒・チャート	橙	外面ヘラケズリ、内面ナデ・ヘラナデ。	胴～脚部破片	器面やや磨滅。

引用・参考文献

青木利文　2013　『朝倉工業団地遺跡群№4』　前橋市教育委員会
新井　仁　2002　『西田遺跡・村中遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
有山径世ほか　2009　『南部拠点地区遺跡群№1』　前橋市教育委員会
有山径世　2010　『南部拠点地区遺跡群№5』　前橋市教育委員会
有山径世　2011　『南部拠点地区遺跡群№6』　前橋市教育委員会
飯田祐二ほか　1997　『上佐鳥中原前遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
飯田祐二ほか　1998　『山王若宮遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
鵜木晋一ほか　1983　『中大門遺跡』　前橋市教育委員会
梅沢重昭　1987　「条里遺構と利根川の変流」『日本の古代遺跡　16　群馬東部』　保育社
大木紳一郎　2002　『徳丸仲田遺跡（2）』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
荻野博巳　1994　『中原遺跡群Ⅱ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
荻野博巳　1996　『中原遺跡群Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
笠原仁史　2008　『前橋城　車橋門丸馬出遺構の調査』　前橋市教育委員会
笠原仁史　2008　『南町市之坪遺跡』　前橋市教育委員会
金子正人ほか　1991　『前田遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
小林朋恵　2011　『前橋城（三の丸門東地点）』　前橋市教育委員会
小林朋恵　2012　『朝倉伊勢西№2遺跡』　前橋市教育委員会
小峰　篤ほか　2004　『上佐鳥中原前Ⅱ遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
権田友寿　2010　『六供遺跡群№6』　前橋市教育委員会
齊木一敏　2000　『前田Ⅴ遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
斉藤利昭　2001　『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂口好孝　1998　『六供下堂木Ⅱ遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
櫻井和哉　2013　『六供遺跡群№7』　前橋市教育委員会
下城正ほか　1996　『栅島・川端遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
下城正ほか　1997　『栅島・川端遺跡　公田東遺跡　公田池尻遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
新保一美　1998　『栅島川端遺跡Ⅱ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
鈴木徳雄　1998　『児玉条里遺跡－児玉北部地区－』　埼玉県児玉郡児玉町教育委員会
スナガ環境測設株式会社　1988　『生川遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
関口功一　2011　「前橋低地周辺の「開発」を巡る二・三の憶説」『群馬歴史民俗』第 32 号　群馬歴史民俗研究会
関口功一　2012　『上毛野の古代農業景観』岩田書院
高井佳弘　2006　「平安時代後期水田耕作の位置様相－群馬県内浅間 B 軽石下水田の検討から－」『生産の考古学』　同成社
高島英之ほか　1998　『公田東遺跡』　警察宿舎遺跡調査会
高橋亨ほか　2006　『六供遺跡群』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
瀧澤典雄　2012　『朝倉工業団地遺跡群№3』　前橋市教育委員会
中里正憲　2007　『砂町遺跡第 1 ～ 3 次調査）・尾柄町Ⅲ遺跡・中之坊遺跡』　玉村町教育委員会
中村岳彦　2010　『房丸桜町遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
長谷川一郎　1995　『西善鍛冶屋遺跡』　西善団地遺跡調査会
林喜久夫　1983　『後閑Ⅱ遺跡』　前橋市教育委員会
林喜久夫　1983　『後閑団地遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
広桃用水史編さん委員会　1994　『広桃用水史』
前田和昭　2006　『文京町№1遺跡』　前橋市教育委員会
前田和昭　2010　『南部拠点地区遺跡群№4』　前橋市教育委員会
前原豊ほか　1986　『鎮守廻り遺跡』　前橋市教育委員会
前原豊ほか　2001　「利根川からの引水遺構である「女溝」の意義」『群馬文化』266 号　群馬県地域文化研究協議会
三土正則　1979　「水田土壌」『URBAN KUBOTA』№13　株式会社クボタ
峰岸純夫・能登健　1981　「赤城南麓の開発と遺構《女堀》」『URBAN KUBOTA』№19　株式会社クボタ
矢島博文　2001　『石倉下宅地遺跡』　表町石倉線遺跡調査会
山田誠司　2009　『六供遺跡群№5』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
吉田聖二　1998　『六供下堂木Ⅲ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
吉田聖二　1999　『六供東京安寺』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
吉田聖二ほか　2000　『鶴光路榎橋Ⅱ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
和久拓照　2012　『朝倉工業団地遺跡群』　前橋市教育委員会
群馬県史編さん委員会　1990　『群馬県史』通史編 1 原始古代 1　群馬県
群馬県史編さん委員会　1991　『群馬県史』通史編 2　群馬県
前橋市史編さん委員会　1971　『前橋市史』第 1 巻　前橋市
前橋市史編さん委員会　1975　『前橋市史』第 3 巻　前橋市

Fig.7　上佐鳥中原前Ⅲ遺跡全体図

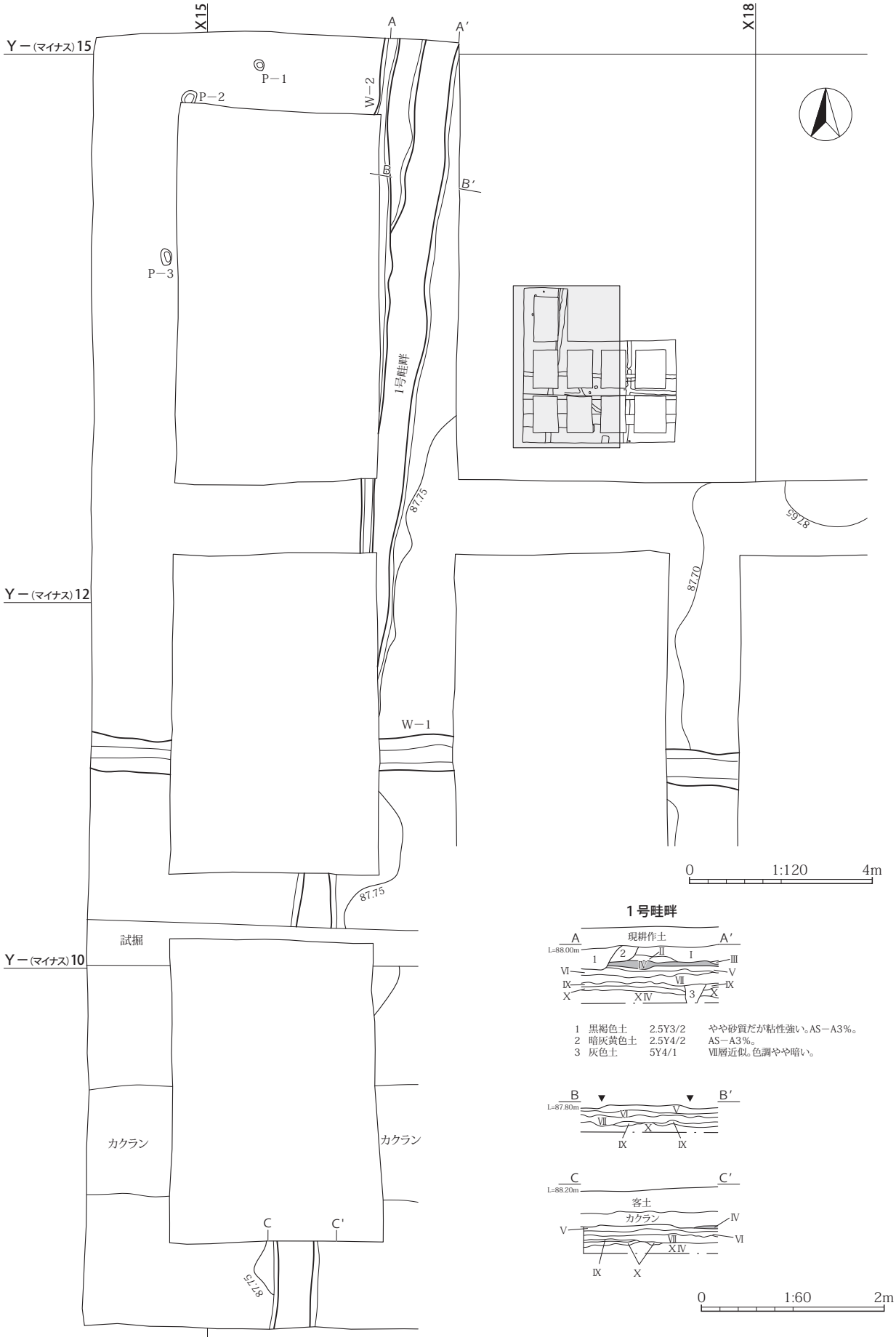
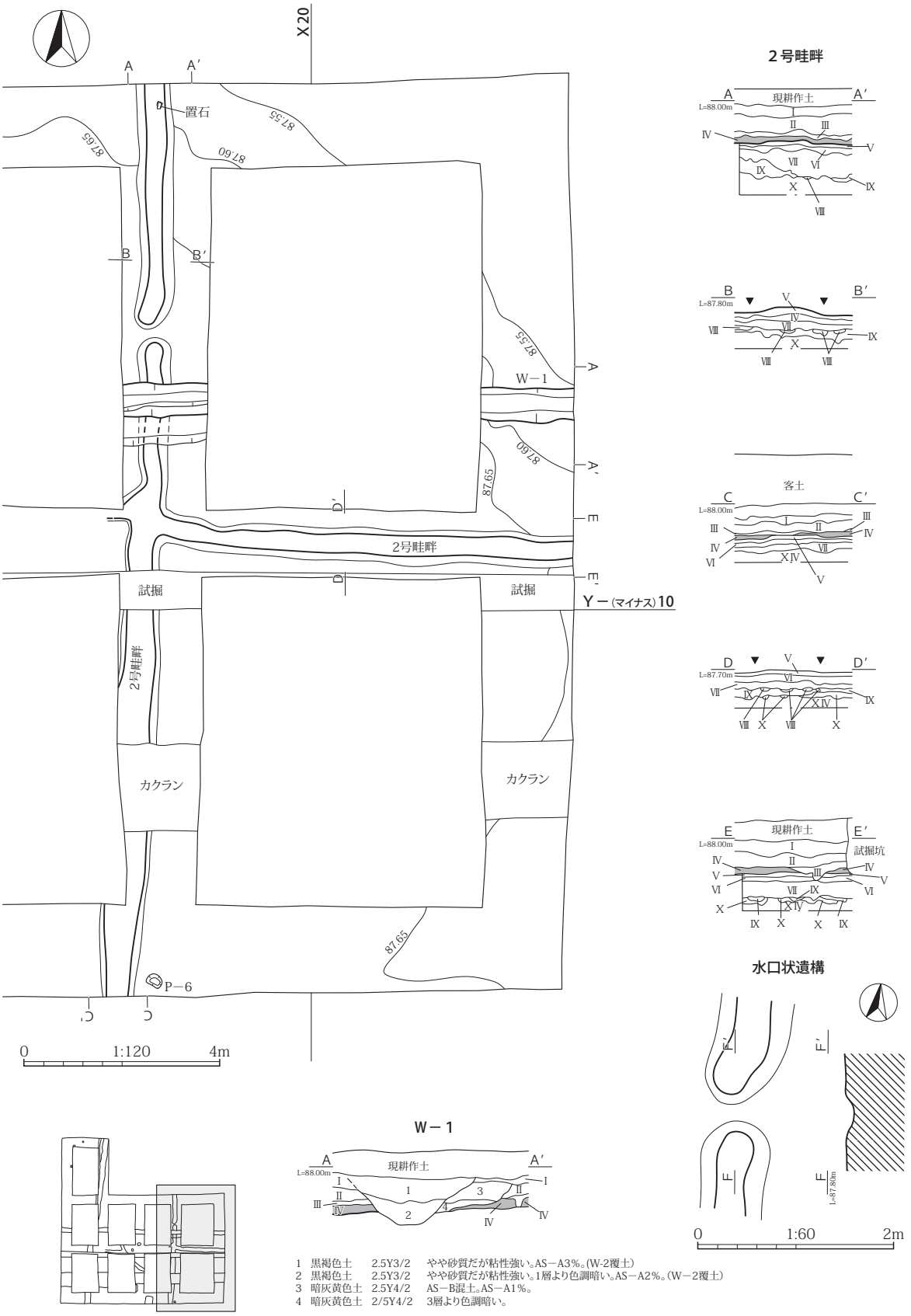


Fig.8　1 号畦畔・W－1 ～ 2



1　黒褐色土　2.5Y3/2　やや砂質だが粘性強い。AS－A3%。(W-2覆土)
2　黒褐色土　2.5Y3/2　やや砂質だが粘性強い。1層より色調暗い。AS－A2%。(W－2覆土)
3　暗灰黄色土　2.5Y4/2　AS－B混土。AS－A1%。
4　暗灰黄色土　2/5Y4/2　3層より色調暗い。

Fig.9　2号畦畔・W－1

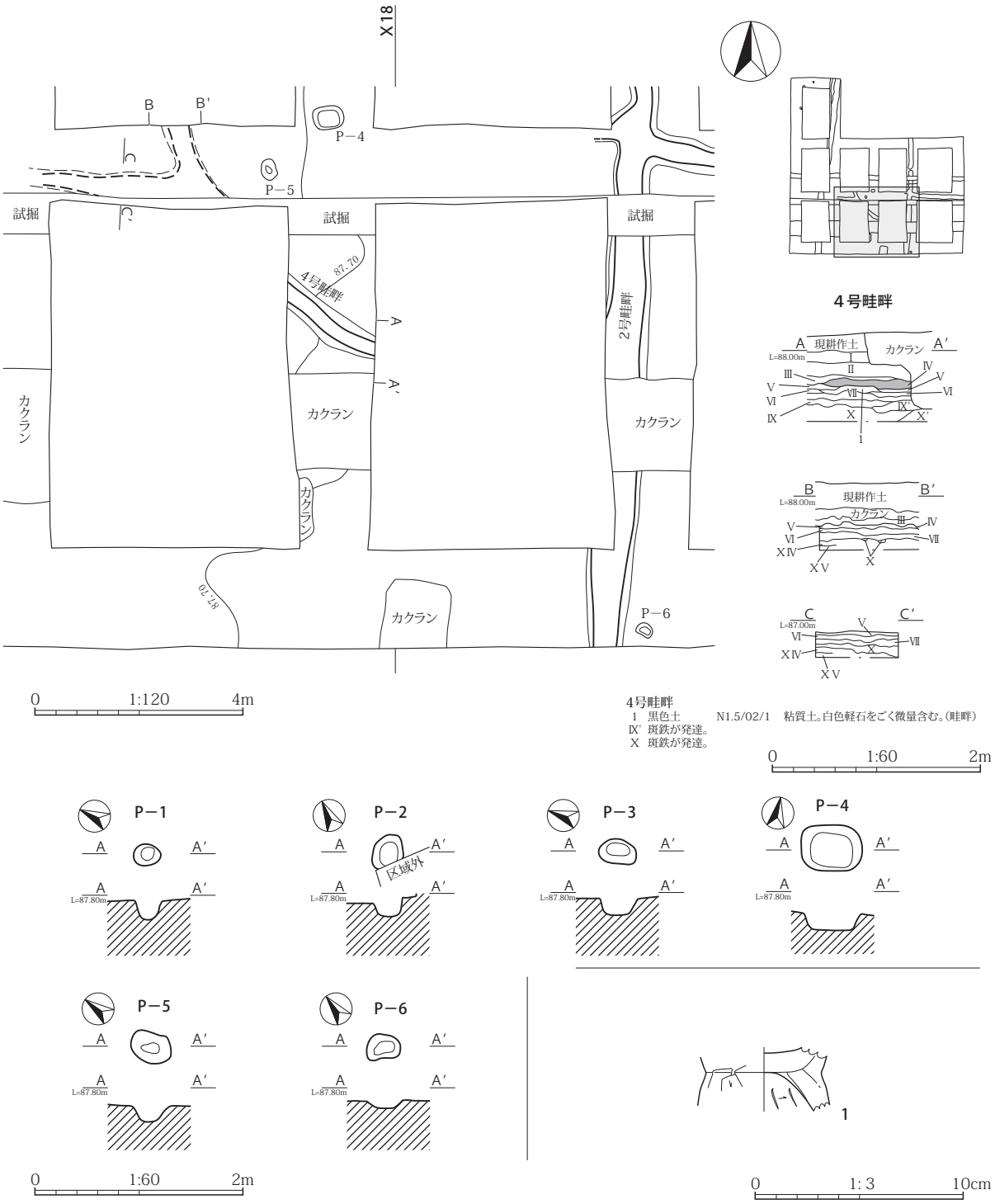
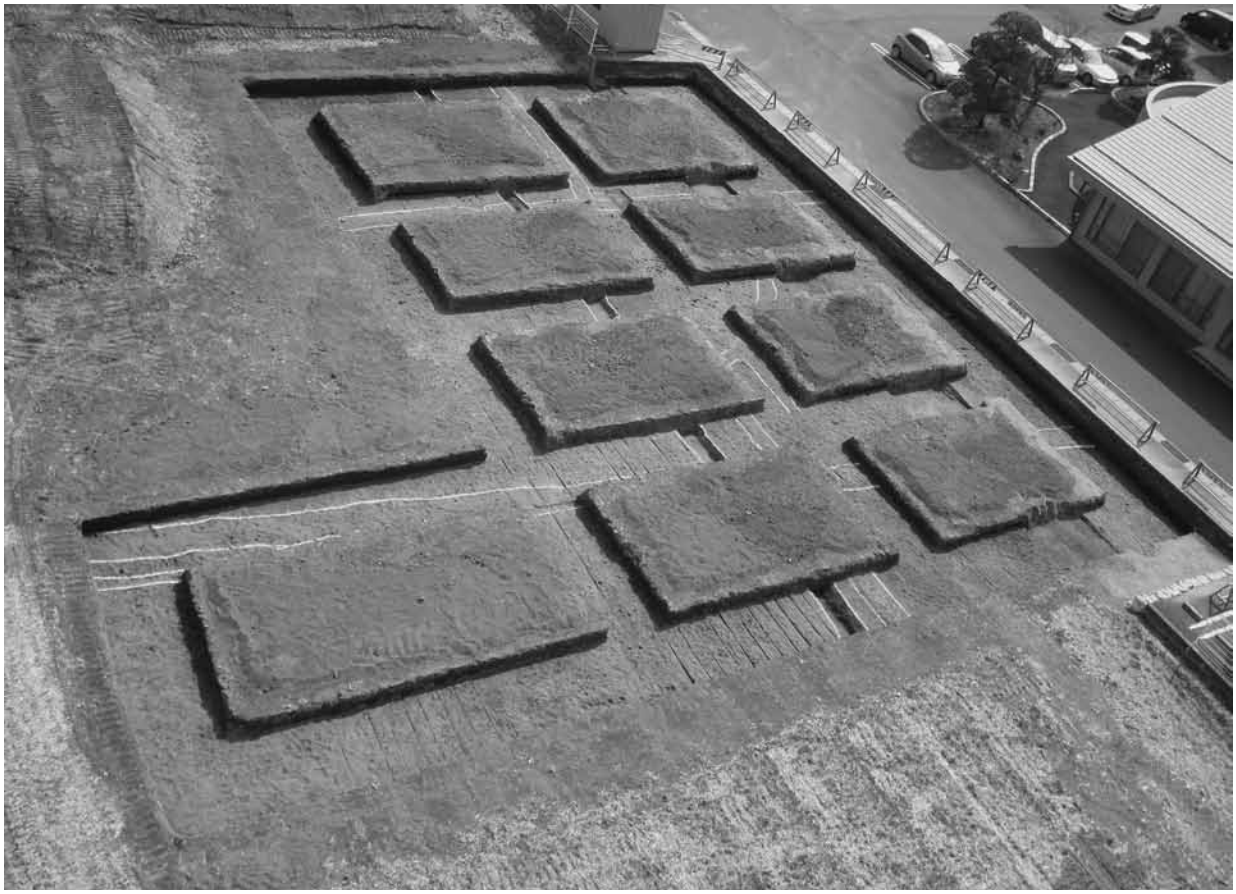


Fig.10　4 号畦畔・P−1 ～ 6・出土遺物

写 真 図 版

調査区全景（北東から）



調査区全景（北西から）

基本層序Ｂ

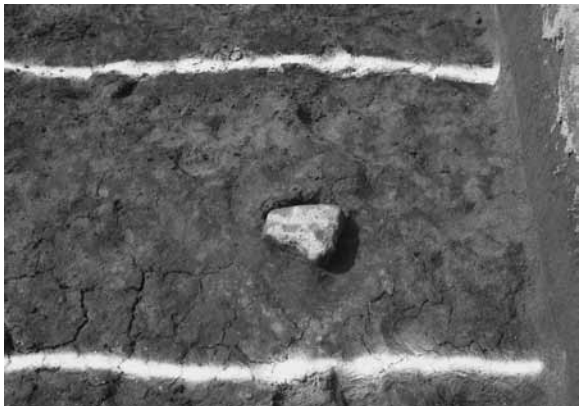
基本層序Ｄ

１号畦畔全景（北から）

１号畦畔セクションＡＡ'（南から）

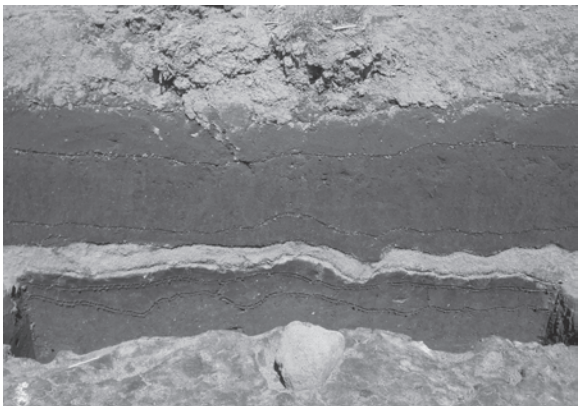
２号畦畔水口状遺構（東から）

２号畦畔全景（北から）

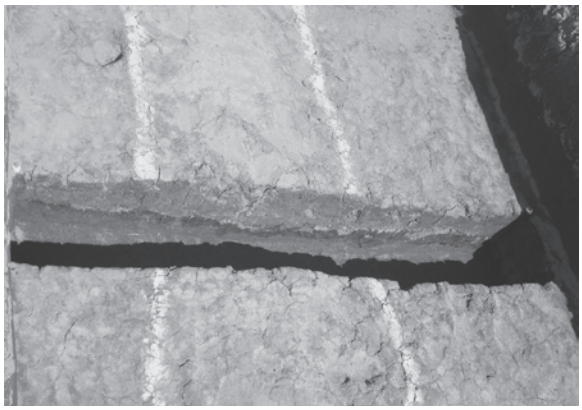


２号畦畔置石検出状態（東から）

２号畦畔（東側へ分岐）



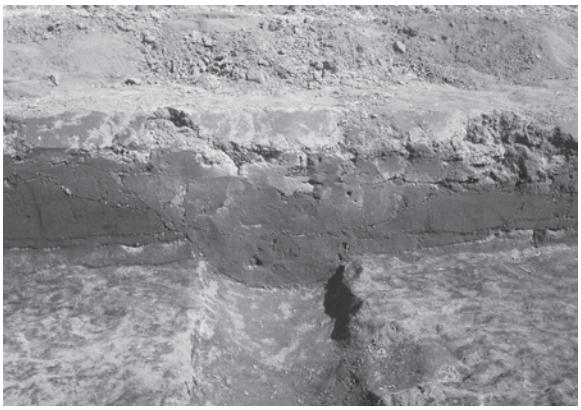
２号畦畔セクションＡＡ'（南から）



２号畦畔セクションＢＢ'（南から）

４号畦畔検出状態（南東から）

４号畦畔セクションＡＡ'（西から）



Ｗ－１号溝セクション（西から）

作業風景（南東から）

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみさとりなかはらまえさんいせき
書名	上佐鳥中原前Ⅲ遺跡
副書名	特別養護老人ホーム増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
編著者名	福田貫之・櫻井和哉
編集機関	山下工業株式会社
	前橋市鼻毛石町 207－8
発行機関	前橋市教育委員会文化財保護課
	群馬県前橋市三俣町 2－10－2
発行年月日	2013 年 5 月 30 日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上佐鳥中原前Ⅲ遺跡（かみさとりなかはらまえ）	群馬県前橋市（ぐんまけんまえばしし） 上佐鳥（かみさとり）771－2、772	10201	24G17	36° 21′ 23″	139° 05′ 03″	2013.03.04 ～ 2013.03.25	302.1㎡	特別養護老人ホーム増築工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上佐鳥中原前Ⅲ遺跡	生産跡	古代～中世	水田跡	土師器片	浅間Ｂ軽石によって被覆された畦畔及び水口を検出。
		近代・現代	溝跡２条		

上佐鳥中原前Ⅲ遺跡

特別養護老人ホーム増築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013 年 5 月 16 日　印刷
2013 年 5 月 30 日　発行

発　行　　前橋市教育委員会
　　前橋市三俣町 2-10-2
編　集　　山下工業株式会社
　　前橋市鼻毛石町 207-8
印　刷　　朝日印刷工業株式会社